

## 特 集

——シンポジウム「ヴィクトリア朝の／と人形(劇)」

背後で操るのは誰だ?

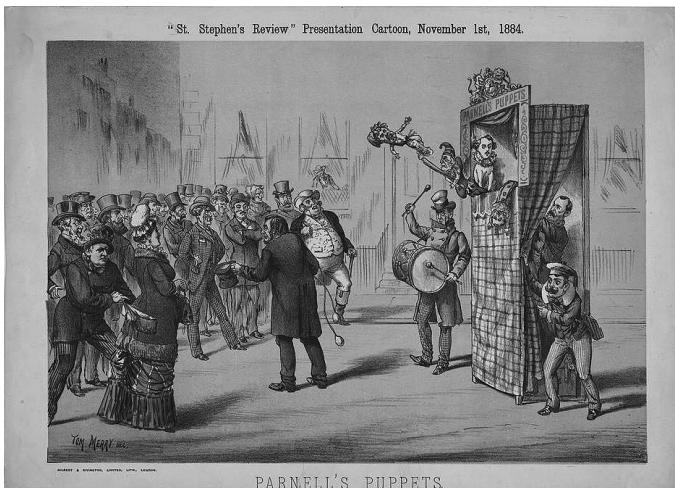
——『パンチ』誌とその周辺から眺めるインド大反乱

加藤 匠(明治大学)

### 1. 背後から操る人形遣い

ヴィクトリア朝期の雑誌を繰る楽しみとは、一瞥しただけでは分からぬ歴史の一側面に触れることが出来るということに尽きるのではないだろうか。松村が『パンチ素描集』でいみじくも指摘しているように(9)、特に『パンチ』のような時代を諷刺した雑誌を、時代のコンテクストの外部から正確に読み取ることは決して容易な作業ではない。全く異なる環境で生きる我々がいくら当時の文化や歴史に精通したところで、当時の人々が日々の生活の中で当たり前のように感じ、暗黙のうちに了解していたことに到達する——換言するならば、当時の人々が置かれた状況に身を置く——ことが至難の業であるのは、一度でも雑誌の頁を繰った経験がある者なら分かってもらえるのではないだろうか。特にそうした困難を経て得られた知見が当初の予測を超えたものであった時に何物にも変えがたい喜びを得ることが出来るからこそ、われわれ研究者は雑誌の頁を繰り続けるのだろう。たとえ奇異に見えようとも、一枚の図版が歴史のある側面を如実に映し出すことは確かにあるからだ。

ここで、1883年から1892年にかけて刊行されていた『セントスティーヴンの批評』(*St Stephen's Review*)誌の1884年11月1日号に掲載されていた一枚の図版(図版1)に注目してほしい<sup>1</sup>。作者はトム・メリーこと、ウィリアム・ミーカム(William Mecham, 1853-1902)。一見したところ、屋外で行なわれているパンチとジュディの人形芝居の上演の様子をわれわれに伝えてくれるもののように見える。実際この図版は、ヴィクトリア&アルバート博物館のホームページ上にあるパンチとジュディの歴史を説明した記事



(図版1) Tom Merry, "Parnell's Puppets" in *St. Stephen's Review* (1884/11/1)

では、19世紀のパンチ芝居の上演風景を伝えるものとして掲載されており、男性がパンチ芝居を上演している舞台の左側で太鼓を叩いてパンパイプを吹くという、19世紀から登場した上演様式が描かれていることがその根拠とされている。

ところが図版をよく見てみると、実に奇妙な光景が描かれていることに気づくはずだ。パンチ芝居の舞台の上には「パーネルの人形芝居」と書かれており、人形を操作しているのは、アイルランド自治運動の指導者で、自由党と保守党の対立をうまく利用しながら主導権を握り、アイルランドの自治拡大や土地改革に奔走したチャールズ・ステュワート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-1891) その人だ<sup>2</sup>。そして、パーネルが右手で操作しているパンチの顔は当時の首相であった自由党のウィリアム・グラッドストン (William Gladstone, 1809-1898)、彼に棒で殴られて飛ばされているのは第三代ソールズベリー侯爵 (Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil, 3rd Marquess of Salisbury, 1830-1903) である。また、パーネルが左手で操作し、パンチに殴られて伸びているのは、アイルランド自治に批判的で、グラッドストンと対立していたハーティントン侯爵 (Spencer Cavendish,

8th Duke of Devonshire, 1833-1908)。パンチ芝居と関連させた形で描かれているこうした人物達から、この図版がアイルランドの自治獲得運動をめぐる対立を背景としているということが読み取れるだろう。その周辺に配されているのもパーネルの周辺で活動していた人物達で、パンチ芝居の舞台の横で太鼓を叩き、パンパイプを吹いているのはパーネルを当時熱心に支持していたティモシー・ヒーリー (Timothy Healy, 1855-1931) 下院議員、中央部で金を集めようと帽子を差し出しているのが、パーネルの側近であったウィリアム・オブライエン (William O'Brien, 1852-1928) 下院議員となっている。パンチの舞台の脇でカーテンをめくり、パーネルが背後で糸を引いているのを人々に晒した髪の男は、当時アイルランド自治法案批判の急先鋒だったランドルフ・チャーチル卿 (Lord Randolph Henry Spencer-Churchill, 1849-1895) であろう。

さらに注目すべきは、図版の左側でユニオンジャック柄のスカートをはいた女性からハンカチをくすねようとしているのが、グラッドストンの側近であったウィリアム・ハーコート (William Harcourt, 1827-1904) であるということだろう。ユニオンジャック、すなわちイギリスから、本来は彼女の財産であるはずのアイルランド権益をグラッドストン一派がくすねようとしており、しかもそれを陰で操っているというのがパーネルであるという認識をここから読み取ることが出来るはずである。この図版が掲載されていた『セントスティーヴンの批評』誌は保守的な傾向が強い週刊誌で、大英帝国の現状を変えようとするあらゆる試みに批判的スタンスを取り続けた (Finola)。したがって、アイルランド議会党の党首で、保守派からはアイルランドの暴力的ナショナリズムとの結びつきが疑われていたパーネルや、彼に融和的で妥協を繰り返していたグラッドストンは同誌で悪党として繰り返し揶揄されることとなつたのである<sup>3</sup>。この図版はそうした流れの中に位置づけられるもので、パンチとジュディの上演状況を現代に伝える歴史資料に留まるものではなく、アイルランド問題をめぐるイングランドの保守的な人々の認識を明確な形で映し出す鏡でもあるのだ。自身の抱く世界観に合致しない現実に対し、背後に表向きの中心人物をパンチ人形のように操る人形遣いが存在するという認識は、何も『セントスティーヴンの批評』誌に限られたものではなく、それこそ現代の陰謀論に至るま

で枚挙に暇がない。ひとは不安を搔き立てるような不可解な出来事が起こると、まずその要因や背景を探るようになるが、その際の典型的な反応がこのような形だろう。

本論文では、ヴィクトリア朝期にそうした反応が見られた事例として、『パンチ』誌を中心としたインド大反乱報道に焦点を当てる。クリストファー・ハーバート (Christopher Herbert) が指摘するように、実際の規模はその名称が想起させるほど大きなものでは決してなかったのだが、大英帝国の歴史を振り返っても、インド大反乱ほど人々を興奮させたものはなかったと言っても過言ではない(2)。パク・ヒュンジ (Park Hyungji) の言葉を借りるならば、「バランスの取れた報道と言うよりも、ゴシック・ホラー的要素の強い報道」(85) が『タイムズ』紙をはじめとする新聞紙上でなされ、結果的に無数のエッセイ、教会での説教、小説、テニスンの作品に代表される詩から戯曲に至るまで、様々な媒体を通じて偏見や誇張が拡散し、集団ヒステリーに近い状況となっていた<sup>4</sup>。パンチ芝居を踏まえて命名された『パンチ』誌が歴史といかに絡み合ったのか、その周辺の資料も駆使しながら、考えていくこととしよう。

## 2. 「カウンポールを忘れるな！」

インド大反乱発生当時の人々が受けた衝撃の大きさは、1857年10月4日にチャールズ・ディ肯ズ (Charles Dickens, 1812-1870) が旧知のアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Burdett-Coutts, 1814-1906) に送った次のような手紙から窺い知ることが出来るだろう。

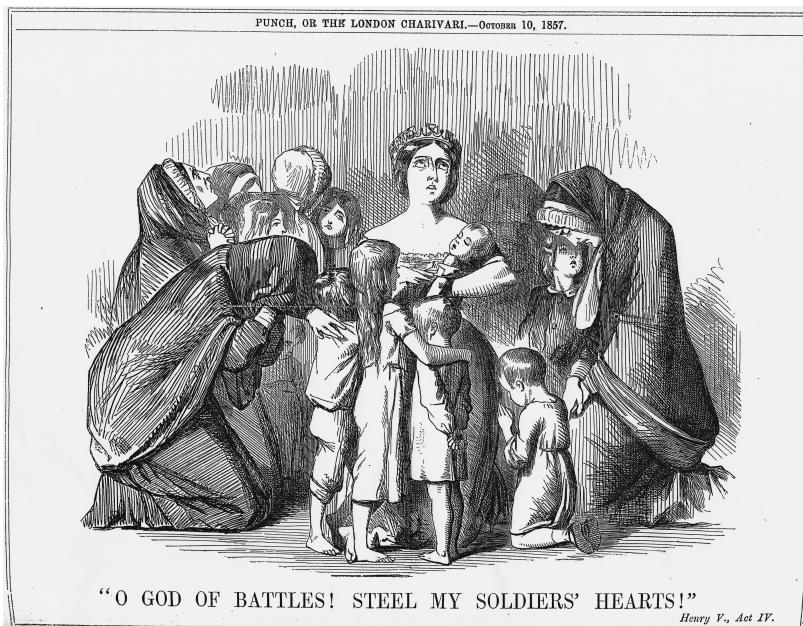
連日『タイムズ』紙に寄せられた手紙を読んでいると、……自分がインドの総司令官であったなら、という気がしてくる。私なら、まず東洋人どもを（彼らがストランドやロンドン、キャムデン・タウンに住んでいる人々とは少しの共通項ももたないかのように）震えあがらせてから、彼らの言語を使って、自分が神によって任命され、先の残虐行為で汚れた民族を全力で殲滅するということ、私がかの地に来たのは他ならぬその目的のためであり、せめてもの慈悲としてあらゆる適切な処置が素早く実行に移されており、彼らを地上から完全に抹殺す

る作業が進行中であるということを宣告するのだが<sup>5</sup>。（Letters 459）

自身をインドの総司令官になぞらえ、反乱者を地上から抹殺してやりたいと願うほどディケンズを激怒させたのは、セポイが犯したとされる女性や子どもに対する残虐行為であり、当時特に注目を集めたのが、1857年7月に発生し、ナーナー・サヒブ（Nana Sahib, 1824-1859?）に率いられた反乱軍がカウンポールに到達した際に起こった虐殺事件であった<sup>6</sup>。三週間に及ぶ包囲の後で、アラハバードまで船で安全に送り届けるという彼の約束を信じた当地のイギリス人が船に乗って出発を待っていると、彼らを案内するはずであったセポイが銃や剣を取りだして虐殺が始まり、無事逃れた150人から200人程の女性や子どもは捕らえられた後に殺害され、遺体は井戸に投げ捨てられたというのがその顛末である。『パンチ氏のヴィクトリア朝年代記』（*Mr. Punch's Victorian Era*, 1887-8）において、インド大反乱でこの事件だけが特に言及されていることは、イギリス人にとってこの事件の重要性を雄弁に物語っており、『パンチ』誌1857年10月10日号に掲載された「ああ戦いの神よ、わが兵の心を非情にしたまえ！」（“O God of Battles! Steel My Soldiers' Hearts!”）（図版2）で、女王ヴィクトリアを中心に、女性と子どもたちの苦しみが描かれているのもこの事件の影響だと思われる。

この虐殺がイギリスで報道されるようになると、救援に向かったヘンリー・ハヴェロック（Henry Havelock, 1795-1857）率いる部隊の到着の前日に女性や子どもの虐殺が行なわれ、部隊がその痕跡を目撃することとなつたという悲劇性も手伝い、「カウンポールを忘れるな！」という言葉を通じて、インド人の抹殺を声高に主張する声が国中に溢れることとなつた。その典型例が1857年8月6日の『タイムズ』紙の記事である。

いかに挑発されようとも、女性や子どもに対して戦争などはありえないのだが、あのセポイの反乱者に対してはごく小さな憐れみすら感じる必要はない。……冷静な方針で臨むにしても、恐怖を感じさせる——英國領インド各地の村で何世代にわたって語り継がれるよう——実例が必要なのだ。仮に今回徹底的に行なうことができないにし



(図版2) “O God of Battles! Steel My Soldiers’ Hearts!” in *Punch* 33 (1857/10/10)

ても、われわれよりも分別をもつ人々にも、東洋人が尊重するものはただ抵抗できないほどの力だけなのだと了解させるまで、何度も繰り返し行なわなくてはならない。……この反乱を鎮圧することで、それがどんなに恐ろしいものであれ、ふさわしいだけの刑罰を血に飢えた反乱者どもに与える任務を負った兵士をイギリスが援助するということを奴らに知らしめてやろう。(4)

こうした復讐を叫ぶ世論を喚起したメディアのひとつが、他ならぬ『パンチ』誌であった。ジョン・テニエルが描いた「正義」(“Justice”) (図版3)といった図版はまさにこの象徴だろう。本来は目隠しをしているはずの正義の女神が目隠しを外し、イギリス軍の兵士と共にセポイに向かって剣を振り下ろす姿からは、当時の人々の怒りが直接伝わってくるかのようだ。女神の背後には砲台が描かれていて、その前にセポイらしき人々の姿がある

(図版3) John Tenniel, "Justice" in *Punch* 33 (1857/9/12)

が、これも彼らに対する報復を象徴する。また、女神が慈悲を請うインド人女性に背を向けているという表象も、多くのイギリス人女性が殺害されたという事実を踏まえたものと解釈しうるだろう。実際、1857年9月12日号における「解き放たれた魂」("LIBERAVIMUS ANIMAM")では女性

と子どもの苦しみが強調されるだけでなく、「奴らが殺した女性と赤ん坊を忘れるな」という言葉とともに、正当性を委ねられた復讐者として自らを規定しているのである。

われわれの剣が虐殺にやってくる。それが来るのは／正義の名の下に。  
 やるべきことは必ず果たす／怒りに燃えた世界は、喝采で迎える／太  
 陽の下で行なわれたその大殺戮を。／そして、怯えたインドはずっと  
 語り継ぐだろう／彼らが犯した殺人と欲望に、イギリス人がいかに応  
 えたか／そして、豊かで豪華なデリーをみじめにした／犯罪で、名誉  
 を汚すこととはなかったと。(108)

同様の主題は、1857年に二回にわたって掲載された詩「哀れなセポイよ！」(“Pity the Poor Sepoys!”)にも反響している。9月5日号の詩では「残酷で、卑怯な若者」としてセポイを表象したうえで、残虐な復讐に異議を唱える人道主義者の主張を揶揄して「ああ！あの哀れな反乱者にあまり厳しくし  
 ちゃだめだ／彼らはわれわれの女性や子どもを苦しめて殺したけれども」、「われわれの兄弟たる黒人を絞首刑にしないで——女性や子どもに対して／彼らは考える限りの悪をすべてやってのけたけれども」(104)と書いて彼らを嘲笑するだけでなく、復讐を正当化する。10月10日号の詩においても、「もし絞首刑をやるのなら、捕らえたセポイはすべて絞首刑にしてしまえ……首を絞めている間に、犯罪者に対する慈悲や許しなどを語るのはやめよう」(154)としており、その姿勢が揺らぐことはない。『パンチ』誌の表象の特徴として、セポイ達に対する容赦ない、怒りに任せた復讐ではなく、法に則った形での処刑を支持し続けたことがあるのだが、そうした特徴もこの最後の箇所には現れている。法を無視して相手を追い込むならば、女性や子どもたちを殺害したセポイと同じであるというわけだ。

このような形で煽られた復讐心の標的となったのが、1857年に就任したばかりのインド総督キャニング卿 (Charles Canning, 1812-1862) であった。彼はその後の統治を円滑に進めるために、反乱者の処罰を定めた布告を発表して本国政府に節度ある対応を求めたのだが、そのような姿勢から、1857年10月24日号の『パンチ』誌では、キャニングは女性や子どもに対す

る残虐行為が近い将来また起きることを望んでいるとされ、「そのようなイギリス人は、戦争が終わり次第すぐにでも絞首刑に処されるべきだ」(170)と批判され、「慈悲深きキャニング」と揶揄されることになった。

当時の人々がここまで反応を示した背景には、インド大反乱以前にはインド人に対する評価が高かったことが挙げられる。カースト制、サティ、女の赤ん坊を殺すといったイギリスとは大きく異なる習慣から、〈理解しがたいインド人〉というイメージが存在していた一方で、インド人を〈勇気とエネルギーに満ち溢れた人々〉として好意的に評する報道も少なくなかった。『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Edinburgh Magazine*)誌に掲載された「ダルハウジー卿支配下のインド」("India under Lord Dalhousie")はその典型だろう。

きちんと指揮をとってやりさえすれば、彼らはよく戦うし、ヨーロッパ人よりも死を恐れずに、時にはより大胆なこともやってのける。……彼らはケルト人や黒人のように無感動ではなく、怠けぐせもない。彼らは自分の置かれた状況を向上させようとするし、多く得られるほど、多くを欲しがるようになる。才能面でも、ヨーロッパ人に引けを取らない。……彼らは性格と知性については、われわれと同じグループに属している。(237)

同じ記事のなかには、インド人の性格を「概して、豊かでエネルギーに満ち溢れており、世界でもっとも柔軟な性格」として肯定的に描いた箇所もあるが、「我々の持つインド帝国」("Our Indian Empire")という記事でも、セポイに対して「我々のセポイは、最良のヨーロッパ軍に次ぐものである」(643)という高い評価が与えられている。これらの記事から窺えるように、イギリスはインドに文明をもたらしただけでなく適切に統治しており、彼らもそれを喜んでいるというのが当時の一般的な解釈だったのだ。

実際にはセポイの抱いていた不満が反乱の主因ではなく、むしろ植民地支配における東インド会社の政策に対する不満や嫌悪が複合的に絡み合った結果として反乱が引き起こされたのだが<sup>7</sup>、従順だと信じていたセポイ達が反乱を起こしたことは、当時の人々にとって、まさに青天の霹靂であつ

たはずである。『ブラックウッズ・マガジン』誌に掲載された「インド兵の解散」(“The Demise of Indian Army”)という記事において登場する、<セポイが忠誠を装っていたのは、来るべき復讐をより恐ろしいものに見せる為であった>という、動搖のあまり論理が破綻した記述は、当時の人々の素直な感情を物語っているものと解釈しうるだろう(101)。同様に、『ハウスマールド・ワーズ』(Household Words) 誌 1858年9月25日号の巻頭に置かれた「ヒンズーの法律」(“Hindoo Law”)という記事にも「反乱前には、インドは征服者に対して忠実で、権威に対して服従し、内面の平和を象徴した存在で、雲が影を投げかけることなどなかった。突然、何の前触れもなく、その絵は血塗られたものとなり、穏やかなインド人は、……以前見知っていた性格と矛盾する、裏切り行為と残忍な行為を始めたのである」(444)という記述を見出すことが出来る。

従来のイメージを覆す現実に直面した人々が行なったこと——それは背後で糸を引く黒幕の存在を探すことであった。あれだけ忠実であったセポイが反乱に及んだとすれば、きっと何らかの陰謀があるはずだ、と当時のイギリス人は考えたのである。その黒幕と見なされたのが、1857年7月に発生したカウンポールでの虐殺事件で多くの女性と子どもに手をかけたとされたナーナー・サーヒブであった。この虐殺事件について報じた同年の『タイムズ』紙の記事を引用する。

われわれは次の日に、ネーナー<sup>8</sup>は捕らわれの身となっていた女性と子どもを皆殺しにし、彼らを裸にして井戸に投げ込んだことを知った。これを実行したのは、われわれが優勢になったのを知ったためであった。……ネーナーはしばらくの間われわれから逃れられるかもしれないが、いつの日か必ず絞首刑になるであろう……(23 Sep, 7)。

ネーナーはある女性とその息子を殺せと命じた。彼女がネーナーに命乞いをしたにもかかわらず、この恥ずべき男は彼女の訴えにはまったく耳を貸さずに、平原に連れ出した。……ついには、手を縛られた状態でそこにずっと立たされた挙句、ピストルで彼らは射殺されたのだ(2 Oct, 6)。

実際の虐殺、特に出発しようと待っていた船に乗っていた人々が虐殺されたサッティ・チャウラ・ガートでの虐殺にどの程度までナーナーが関与していたのかは研究者によても意見が分かれるところなのだが<sup>9</sup>、彼がセポイたちを操り、反乱に駆り立てた人形遣いであるかのようなイメージがイギリスでは構築されていくこととなった。1857年10月10日号の『パンチ』誌に掲載された「哀れなセポイに憐れみを！」(“PITY FOR THE POOR SEPOYS!”)では、追伸として「哀れなネーナー・サーヒフよ！彼が万一捕らえられ、復讐心に燃えたわが当局が彼の命を助けるよう説き伏せられなかつたとすれば、イギリス人女性や子どもたちに彼がやつたささやかな罪の償いとして、クロロホルムの使用など許されないように！」という言葉が付け加えられており、反乱の背後にいるとされたナーナーに対する怒りが前景化する。

最終的にナーナーは1857年7月にカウンポールを奪還され、その後再奪還を試みたものの失敗し、11月を境に消息を絶ってしまった。セポイ達を背後から操っていたとされた男は、人々の怒りを背に静かに退場していく、イギリス側が望んだような、彼に虐殺の責任を負わせて死刑にするという展開が実現することはなかった。しかし、当時のイギリス人はそれを黙つて見守っていたわけではない。やり場のない怒りに当時の人々がいかに向き合ったのか、それを考える上で興味深いヒントを提供してくれるのが、アンドレア・キャストン・タンゲ(Andrea Kaston Tange)の論文である。カウンポールで虐殺が起こったのは1857年6月から7月にかけてなのだが、イギリス国内の新聞にナーナーの肖像画が掲載されたのは同年9月26日のこと。タンゲが注目したのは、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(*Illustrated London News*)紙と『イラストレイテッド・タイムズ』(*Illustrated Times*)紙に同時に掲載された肖像画二枚が、同一人物を描いているようには見えないという事実である(図版4,5)。前者のナーナーとされた人物は顎鬚を生やし、いかにも傲慢そうな、威厳ある人物だが、後者は口髭を生やした小太りの男で、服装はいかにもハーレム風の人物となっている。両紙にとっては、ナーナー本人を写実的に描いた肖像画よりも、<倫理性に堕落し、争いを好み、好色で、危険な人物>という、既存のメロドラマの悪役のイメージに沿って視覚化することが重視されたというのだ(203)。



(図版4) "Nana Sahib" in *The Illustrated London News* (1857/9/26)



(図版5) "Nana Sahib" in the *Illustrated Times* (1857/9/26)

当時の新聞が悪役イメージをナーナーに投影し、勸善懲惡のメロドラマの枠組みに彼を押し込むことで来るべき破滅を想起させ、当時のイギリス人読者の溜飲を下げさせようとしていたことが窺える事実である。

現実では果たせないかもしれない報復をメロドラマの形式を借りて描き、消息を絶ったナーナーに対する報復が叶わなくとも、それに代わる満足感を提供しようという試み——ディケンズとウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-1889) の共作「あるイギリス人捕虜の冒険」(“The Perils of Certain English Prisoners,” 1857) は、その実例を提供してくれている。復讐を叫ぶ世論に応える形で、スパイ行為を働いてイギリス人の信頼を裏切ったネイティヴ・アメリカンと黒人の混血児である、現地人クリスチヤン・ジョージ・キングの処刑が作品に書き込まれているのだ。

「あれは何だ」マリオン船長がボートから大声をあげた。声が反響している以外、まったくの沈黙。

「裏切り者のスパイだな」カートン司令官はそう言い、弾をまた装填するため、私に銃を手渡した。「あの動物は、別名クリスチヤン・ジョージ・キングと言うはずだ！」

弾は心臓を貫通した。何人かがその場に走って行って彼を引っ張り出し、湿った泥を顔に塗りつけたが、彼の顔は世界が終わるまで、これ以上何の反応も示すことはないだろう。

「あの木で首を吊ってしまおう」カートン司令官は大声で言った。(205)

信頼に値しない黒人、キングがただ殺されるのではなく、その死体が絞首刑にされるという描写は、<反乱を鎮圧するためには、反乱を起こした現地の人々を殲滅することが最良の手段である>と考え、スピーチで「イギリスの大砲から飛ばされた……惨めなインド人」を切り刻むことすら支持したディケンズの思いを反映したものと解釈しうるだろう (Speeches, 284)<sup>10</sup>。彼がこの場面を作品の核と考えていたことは、この作品で唯一の挿絵がこの場面を描いたものであることからも窺える。秩序の破壊に加担した者を絞首刑にすることは支配者としての自らの位置を再確認する行為であり、読者は溜飲を下げることになったはずだ。

こうした流れの中で位置づけるべきは、ナーナーを悪役とした芝居がいくつか上演されたという事実である。その中で最も大きな成功を収めたのが、反乱の翌年にニューヨークで初演され、後にイギリスでも上演された、ダイオン・ブーシロー (Dion Boucicault, 1820-1890) の『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』(Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow, 1858) である。ここでもナーナーは「老人だけは開放してやれ。イギリスの人々もがナーナー・サービズの復讐について耳にした際に、奴らが顔面蒼白になるような恐怖を感じさせるための証言を地上でもらうことになるかもしれないからな」(123)などといった無慈悲な台詞を語ることになるのだが、注目すべきは、カウンポール虐殺の首謀者であったはずのナーナーがラクナウに現われ、イギリスの統治に対する不満ではなく、キャンベル夫人をハーレムに招くために反乱を起こしたものとされるなど、歴史上の事実が著しく歪曲され、メロドラマの悪役の枠組に近づけるための改変がなされている点である<sup>11</sup>。

ナーナー：よく聞け！私はそなたをベナレスで見た——そなたの魂が私の目を通して心に入り込み、私の魂を外に押し出てしまったのだ。私はそなたを追いかけた——太陽が沈んでしまうように、そなたが私の追いかけることのできない場所に去ってしまうまで。ビトホーに行つたが、妻たちは私の中にあるそなたの魂を傷つけるのだ。私はやつらを金持ち連中にやり、追い払った——私のハーレムは寒々としておる！私はそこで孤独なのだ。ハーレムがここにある魂を心待ちにしておるのだよ。

キャンベル夫人：あなたは私の子どもたちを殺し、母親の名誉を汚そうというのね。

ナーナー：そなたの子どもは私のもの、つまりマラータの王子となる。一緒に来れば、血が流されることはないぞ。部下たちは引き上げさせよう。ラクナウは救われ、平和が回復されるのだ。(113)

ここにはナーナーを反乱に駆り立てたとされる、養子による相続を認めない「失権の原理」に対する理解やイギリス側の失政に対する反省は皆無で

あり、ヒンドゥー教徒のナーナーとイスラム世界を彷彿とさせるハーレムを結びつけるなど、当時の人々の強い偏見が色濃く反映されたものとなっている。ナーナーを演じた役者——誰も引き受けようとしなかったため、結局ブーシロー自身が担当せざるを得なくなった——に対して、腐った果物や壊れた傘が投げつけられたというエピソード (Brantlinger 206) は、当時の人々のやり場のない怒りの象徴と言えるのかもしれない。この引用の直後に、主人公ジェシー・ブラウンがキャンベル夫人の子どもを守るためにナーナーを刺し、彼がソファに倒れ込む場面が活人画として演じられたのだが、人々が快哉を上げる声が劇場に響き渡ったことは想像に難くない。

### 3. 操られているのは誰だ？

背後から操る人形遣いというイメージは雑誌の挿絵を中心に広く用いられてきたが、その延長線上にあるのは、他ならぬ自分自身が誰かの操り人形であるかもしれないという恐怖心であろう。ヴィクトリア朝期を代表する小説家のひとりであるアンソニー・トロロープ (Anthony Trollope, 1815-1882) の小説『フラムリー牧師館』(Framley Parsonage, 1861) に登場する、ホイッグ党の領袖であるオムニアム公爵が住むギャザラム城の催しに集った国会議員であるナサニエル・サワビーとサップルハウスのやり取りから浮かび上がってくるのは、そうした恐怖心である。

「高教会派の紳士たちについて言えば、われわれが木を揺らせば、果実を拾うのを嫌がることはないでしょう」サワビー氏は言った。

「果実を拾うことについては、そうかもしれませんね」とサップルハウス氏。彼こそが国を救うべき人物ではないか？もしそうなら、どうして自分自身でその果物を拾い上げようとしているのか？この国で一番の権力者が、彼をそんな救済者として指名したのではないだろうか？今のところ、國の方ではもう救いを必要としなくなっているが、それでも良い時が来るということはありうるのだろうか？たとえ実際に続いている戦争が彼の助けを借りることなく、他の救いによって終わろうとしていたにせよ、別の戦争の噂があるではないか？サップルハウス氏は指差したあの国と、敵の友人たる首相のことを念頭に置いて、力強い

救済者としての自分の仕事がまだ残っているかもしれないと考えた。いま大衆は目覚め、状況を理解した。大衆の声が自分が必要としていると思い込んだら、驚くほど大衆の英知に信頼を置くことになるものだ。「民の声は神の声」というやつだ。……それから、彼は自分こそがギャザラム城の黒幕であり、そこにいる人々は皆自分の思い通りになる操り人形だと感じた。友人たちが操り人形であり、その紐を手にしているのが自分だと感じるのはなんと愉快なことだろう。しかし、仮にサブルハウス氏自身が操り人形だとしたら？

それから数か月が経ち、袋叩きとなった首相が実際に政権から退かざるを得なくなり、敵意ある貝殻をたくさん浴びせられて、「ブルータス、お前もか！」と口癖になるほど叫んだ時、あらゆる場所であらゆる人々がギャザラム城における偉大なる同盟のことを口にした。世間の人々の噂によると、オムニアム公爵は現状を大いに考慮し、広く国民の幸せのため、なにか大きな措置をとる必要があることを驚の眼で見抜いて、下院の多くの議員と貴族院の数人の議員をすぐ屋敷に招聘した——ここでは、非常に尊敬され、実に賢いボウナジーズ卿の列席が特に強調された。さらに噂によれば、この深遠なる秘密会議で公爵が見解を明らかにしたという。首相はホイッグ党から出ているが、倒閣の必要があることがこうして合意された。国はそれを望んでいたし、公爵は自らの義務を果たしたのだ。世間ではこれが例の名高い同盟の始まりだと言い、これによって内閣は倒され——さらに『グッディー・ツーシューズ』紙が付け加えたことによれば、国は救われたのだ。しかし、『ジュピター』紙は手柄を独り占めした。そして、それは決して間違ってはいなかった。あらゆる手柄は『ジュピター』紙のものだったのだ——今回だけでなく、他の様々なことにおいても。(118-9)

サブルハウスが自らを黒幕と考え、いかに愉快な思いをしようとも、世間の噂にあるように、実際にホイッグ一派を操る黒幕は作中で「とてつもなく巨大なホイッグの山」(115)とされるオムニアム公爵であり、サブルハウスは実際には背後から操られる人形に過ぎない。実際の公爵は世間の噂とは異なり、政治をはじめとする現世的な問題からは超越した存在でありな

がらも、選挙でホイッグ党の候補者を支持して確実に勝利に導くことでその議員を操る人物だ。彼の持つ権威は、彼の支持を失ったサワビーが選挙で敗れて議員資格を失うという形でも前景化され、彼こそがまさに背後から国会議員を操る黒幕ということになる。

ここでもうひとつ注目すべきなのは、最後に登場する『ジュピター』紙、すなわち『タイムズ』紙には、手柄を独り占め出来るほどの権力があるとされていることだろう。ピーター・マイルズとデヴィッド・スキルトンが『フラムリー牧師館』のペニギン版の序文で指摘したように、同時代の出来事を作中に取り込むことで、登場人物が読者と同じ世界に生きているように感じさせるという特徴がトロロープの小説にはある(12)。もっとも彼の長編小説においては、大英帝国への関心はこうした簡潔な言及に留まるものが多く、作品を通じて深化されることはない。一方で短編小説においては、自身の海外経験を踏まえ、北米から西インド諸島、中米、中近東に至るまで、世界各地を舞台に展開するものの、中心で描かれるのは周囲の状況に順応できないイギリス人達の姿である<sup>12</sup>。

実はここで言及されている「実際に続いている戦争」とは、「インド大反乱」を指している。トロロープの執筆時には大勢が決していたとはいえ、実際の戦闘はまだ続いていたのだ。そしてインド大反乱において、世論の行く末を決定していたものこそ、まさに『タイムズ』紙や『パンチ』誌をはじめとする様々なメディアに他ならない。「あらゆる手柄は『ジュピター』紙のものだったのだ——今回だけでなく、他の様々なことにおいても」とあるが、実際に様々なメディアには世論を形成するだけの能力があった。『ジュピター』紙を後ろ盾としているサップルハウスは、同紙が持つ世論形成力を背景とする権力によっても、操り人形にされているのである。

サップルハウスの姿から垣間見えるのは、自身が周囲を操っているつもりで、実は自分が何者かに操られているのではないかという、自身の存在を揺るがしかねない不安が人間には確かに存在するということだろう。人形と人形遣いというイメージは黒幕の存在を確かに示唆する一方で、権力を手にしているようでいて、実際には危うい存在に過ぎない自分自身の存在を痛感させるものともなっているのである。

## 註

- 1 この図版をご教示くださった岩田託子先生に感謝する。
- 2 パーネルに関しては、ポール・ビュー (Paul Bew) による伝記を参照のこと。同じ筆者が執筆した *DNB* での記述も、彼の生涯を簡潔にまとめていて、読み応えがある。
- 3 こうした報道を行なったのは『セントスティーヴンの批評』誌だけではなく、『パンチ』誌も同様であった。1882年に起きたアイルランド首席秘書官フレデリック・キャヴェンディッシュらが殺害されたフェニックス・パーク殺人事件を受けて、同年の5月20日号に掲載された‘The Irish Frankenstein’では、パーネルは怪物を生み出したフランケンシュタイン博士に擬えられていた。また1885年10月24日号に掲載された‘The Irish “Vampire”’では、パーネルの顔をし、翼に“NATIONAL LEAGUE”と書かれた吸血コウモリがアイルランドの象徴たるヒベルニアを襲う場面が描かれている。
- 4 パトリック・ブラントリンガー (Patrick Brantlinger) は、当時人気を博し、影響力をもった煽情的な目撃記事として、Mrs. J. A. Harris, *Lady's Diary of the Siege of Lucknow* (1858)、Robert Gibney, *My Escape from the Mutineers in Oudh* (1858)、Mowbray Thompson, *Story of Cawnpore* (1859) を、歴史書としては Charles Ball, *History of the Indian Mutiny* (1858)、Sir John William Kaye, *Sepoy War in India* (1864-80)、T. Rice Holmes, *History of the Indian Mutiny* (1898) を、詩ではテニソンの作品の他に Sir George Trevelyan, *Cawnpore* (1865) を代表作として提示している (202)。
- 5 同年10月23日付のエミール・デ・ラ・ルーに宛てた手紙にも、同趣旨の内容が見られる (*Letters* 473)。
- 6 カウンポール虐殺を含むカウンポールでの攻防に関しては、ガードナー (355-367) を参照のこと。Rudrangshu Mukherjee が指摘するように、女性達に対する性暴力についてはイギリス、インド双方から黙殺されるきらいがあったが、より批判的な考察が進められていくべきだろう。
- 7 インド大反乱の背景に関しては、ビバン・チャンドラ (138-147) を参照のこと。ラナジット・グハが指摘した、農民の暴動の背景を見ようとした支配者側の典型的な反応がここに見られる (27-29)。
- 8 この記事にあるように、ナーナー・サーヒブについて、ネーナー・サーヒブ (Nena Sahib) という表記が用いられることがあるなど、当時複数の表記が混在していた。彼に関する情報が錯綜していたことを示すひとつの例であろう。
- 9 ブラントリンガー (201-5) を参照のこと。ただし、ナーナーがどの程度反

乱に関わっていたのかについては状況証拠の域を出るものもなく、詳しくは分かっていない（長崎：216-221）。ヒバートはナーナーがセポイからの依頼を受けて反乱に参加したとしているが（176-7）、ディヴィッドは計画段階からナーナーが関わっていたとしている（50-1）。この虐殺についても、ナーナーがあらかじめ計画していたわけではなく、部下たちが許可なく始めた可能性をヒバートは指摘している（194）。

- 10 スピーチ自体は1858年12月3日に行なわれたものであるが、インドの刑罰のひとつに大砲で人間を吹き飛ばすという手法があることは、同年の『ハウスホールド・ワーズ』誌3月27日号の「射殺せよ！」（“Blown Away!”）で既に言及されていた。ディケンズのスピーチは、その記事を念頭に置いてなされたものと思われる。
- 11 戯曲集の編者であるトムソンは、執筆当時ブーシローがアメリカに滞在しており、インドの状況を知ることが困難だったことから、新聞に掲載されたラクナウに滞在した婦人の手紙を軸に、適宜根拠に乏しい風説を取り込む形で戯曲を作成したと指摘している（7）。ブーシローにとって歴史的事実よりもメロドラマの形式が活かせる題材としてのナーナーが重要だったことが窺える指摘であろう。
- 12 トロロープのこうした側面が見られるのが、中近東を舞台とした「ピラミッドに来た女」（“An Unprotected Female at the Pyramids,” 1860）や「馬に乗りパレスチナを旅する」（“A Ride across Palestine,” 1861）といった作品である。どちらの作品においても、個性的な女性達を描くことに主眼が置かれており、当地の風俗は作品のスタイルに過ぎない。

#### 引用文献

- Bew, Paul. *C. S. Parnell*. Dublin: Gill and Macmillan, 1980.
- Boucicault, Dion. *Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow. Plays by Dion Boucicault*. Ed. Peter Thomson. Cambridge: Cambridge UP, 1984: 101-132.
- [Bourne, Henry Richard Fox.] “Hindoo Law.” *Household Words* 18 (1858): 337-341.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness*. Ithaca: Cornell UP, 1988.
- チャンドラ、ビバン 『近代インドの歴史』。栗屋利江訳 東京：山川出版社、2001年。
- [Craig, George.] “Blown Away!” *Household Words* 17 (1858): 348-350.
- David, Saul. *The Indian Mutiny*. London: Penguin Books, 2003.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*, vol. VIII. Ed. Graham Story and Kathleen Tillotson. Oxford: Oxford UP, 1995.

- . "The Perils of Certain English Prisoners, and their Treasure in Women, Children, Silver, and Jewels." *Christmas Stories*. London: Oxford UP, 1956: 161-208.
- . *The Speeches of Charles Dickens*. Ed. K. J. Fielding. Oxford: Clarendon P, 1960.
- Finola. 'Parnell, Home Rule, and Tom Merry.' *Roaringwater Journal*. 2020-08-23. <https://roaringwaterjournal.com/2020/08/23/parnell-home-rule-and-tom-merry/>. (参照 2024-05-26)
- ガードナー、ブライアン 『イギリス東インド会社』。浜本正夫訳 東京：リブロポート。1989 年。
- [Gregg, Hilda.] "The Indian Mutiny in Fiction." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 161 (1897): 218-231.
- グハ、R 『サバルタンの歴史：インド史の脱構築』。竹中千春訳 東京：岩波書店、1998 年。
- [Hamley, C.] "Our Indian Empire." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 82 (1856) : 643-664.
- Herbert, Christopher. *War of No Pity: The Indian Mutiny and Victorian Trauma*. Princeton and Oxford: Princeton UP, 2008.
- Hibbert, Christopher. *The Great Mutiny: India 1857*. London: Penguin Books, 1978.
- [Kaye, J. W.] "The Demise of the Indian Army." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 90 (1861): 100-114.
- "LIBERAVIMUS ANIMAM." *Punch* 33 (1857).
- 松村昌家 『パンチ素描集—19 世紀のロンドン』。東京、岩波書店、1994 年。
- Mr. Punch's Victorian Era: an illustrated chronicle of fifty years of the reign of Her Majesty the Queen*. 1887-1888. Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1995.
- Mukherjee, Rudrangshu. *Spectre of Violence: the 1857 Kanpur Massacres*. New Delhi: Penguin Books, 1998.
- 長崎暢子 『インド大反乱一八五七年』。東京、筑摩書房、2022 年 [1981 年]。
- Park, Hyungji. "The Story of Our Lives': *The Moonstone* and the Indian Mutiny in *All the Year Round*." *Negotiating India in the Nineteenth-century Media*. Ed. David Finkelstein & Douglas M. Peers. New York: St. Martin's Press, 2000: 84-109.
- [Patterson, R. H.] "India under Lord Dalhousie." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 80 (1856): 127-141.
- Peters, Laura. "Perilous Adventures: Dickens and Popular Orphan Adventure Narratives." *Negotiating India in the Nineteenth-century Media*. Ed. David Finkelstein & Douglas M. Peers. New York: St. Martin's Press, 2000: 110-134.
- Punch* vol. XXXIII (1857)
- Tange, Andrea Kaston. "Picturing the Villain: Image-Making and the Indian

- Uprising” *Victorian Studies* 63(2) (2021): 193-223.
- “That’s the way to do it!”: A History of Punch & Judy’. Victoria & Albert Museum. <https://www.vam.ac.uk/articles/thats-the-way-to-do-it-a-history-of-punch-and-judy>. (参照 2024-05-26)
- The Times*, 6 Aug 1857.
- The Times*, 17 Sep 1857.
- The Times*, 23 Sep 1857.
- The Times*, 2 Oct 1857.
- The Times*, 17 Oct 1857.
- Trollope, Anthony. “An Unprotected Female at the Pyramids.” *The Complete Short Stories*. Pickering: Blackthorn P, 2019.
- , “A Ride across Palestine.” *The Complete Short Stories*. Pickering: Blackthorn P, 2019.
- , *Framley Parsonage*. Edited with an introduction and notes by David Skilton and Peter Miles. Harmondsworth: Penguin, 1986.

## Summary

# Who Was the Puppet Master?: The Indian Rebellion in *Punch* and Other Victorian Periodicals

Takumi Kato

This essay aims to explore how *Punch* and other Victorian periodicals reacted to the Indian Rebellion in 1857. British people experienced the Rebellion itself as their greatest and most fearful disaster. Especially, the massacre at Cawnpore made an incredible impact on them so that it unleashed a national cry for unmitigated vengeance on Indian rebels such as Nana Sahib. The cartoon called “Justice” (1857) in *Punch* reflects the national frenzy at that time.

As Charles Stewart Parnell was to be repeatedly represented as a puppet master in *St. Stephen’s Review* in the 1880s, Nana Sahib was characterised as a villain behind the Rebellion in many periodicals. Since Indian Sepoys had been highly regarded as faithful, British people thought that he must have deceived and handled them masterfully. In spite of the retributive impulses of British people, Nana Sahib disappeared after the East India Company’s recapture of Cawnpore. As a result, some writers and artists tried to punish him in their works. As if they had avenged the murder of the victimised women and children, Charles Dickens and Wilkie Collins provided an impressive description of a native traitor named Sir Christian George King in “The Perils of Certain English Prisoners” (1857). Dion Boucicault introduced Nana Sahib as a lustful villain in conventions of melodrama in *Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow* (1858), where the main character Jessie Brown stabs him.

While the imagery of a puppet and a puppet master was used in political

cartoons, it can also make us feel keenly how fragile we are even when we stand at the summit of power. In Anthony Trollope's *Framley Parsonage* (1861), Mr Supplehouse wonders whether he is a puppet, even when he feels that he is the mastermind at Gatherum Castle. In fact, he is manipulated by the *Jupiter* (Trollope's satire of *The Times*) as well as The Duke of Omnium. We can be overwhelmed by a feeling of dread that we are the puppets manipulated by someone else.

